

いなか旅見聞録

栗(クリ)

クリの原産地は日本と朝鮮半島と言われている。



青森県の三内丸山遺跡からもクリが出土しており、縄文時代にはすでに栽培もされていたようですし、古事記(七十二年)や日本書紀(七二〇年)にも登場し、昔から日本人の生活になじみ深い木の実です。

平安時代の法典「延喜式(えんぎしき九二七年)」には、乾燥させて皮をむいた「平栗子(かちぐり)」や、蒸して粉にした「平栗子(ひらぐり)」なども記載されていて、そのころから京都の丹波地域が産地になっていました。

今も「丹波栗」は有名ですね。

また、クリの木は堅くて腐りにくいので、建物の柱や土台、鉄道線路の枕木、家具等の指物の素材として使われます。特に水回りに使うといいそうです。

おとぎ話のサル蟹合戦では、クリは蟹の子の味方となって大活躍します。



物語の中では囲炉裏の火で弾けてサルに飛びかかるのですが、イガのトゲも相当痛そうで、なかなかの強者とみえます。くりくり坊主は正義感の強い少年のイメージです。

これはクリのイガを炭に焼いたもの。造形的にも面白い。硬く鋭い棘は炭になるとたんにフラジャイルという形容詞がびつたりのオブジェになります。





栗の雌花は、紐状の雄花の根元にちよこんと座っています。

いずれは硬くとがるイガも、今の段階では柔らかい緑のポンポンです。

正確に言うとポンポンの中から開いている黄色いものが「花」。花は3つ。だから栗の実はいガの中に三個入っているのですね。